

《評論連載》

絵本論を探して

はじめに（第一回）

灰島 かり

絵本の特徴

絵本は普通、「絵」と「文」という二つの要素のコラボレーションによって、成立する。同じように絵と文がコラボするものにマンガがあるが、マンガがふつうは一人で読まれるのに対して、絵本は、大人が子どもに向かって音読することが多い。音読されることと、大人が介在すること、この点がマンガと決定的に違うところだろう。その結果「絵」と「文」の他に「声」、さらに大人と子どもが共にいる「場」が発生する。それだけ考えなければいけない要素が多いわけで、そのぶん絵本は「児童文学」とも「マンガ」とも離れてくる。つまり絵本独自の有りようがあるわけで、この連載の目的は、それを探りたいということだ。

多くの要素が介在していることは、個々の絵本体験を探ればすぐ気づくことだろう。絵本全般について書く前に、ひとつだけ私自身の体験を書いておきたい。

絵本クラブ

私は二〇〇四年からある児童養護施設で、小学校低学年の子どもたちと絵本を読むようになった。この児童養護施設（以下ホーム）では、入園している子どもたちのほぼ八割が、親からの虐待を経験している旨、ホームから情報をもたらしていた（厚生労働省の調査によると、二〇〇六年度の時点で、養護施設にいる子どもうちの約六割が被虐待児とあり、さらに増える傾向にあることが指摘されている）。子どもたちに絵本を楽しんでもらいたいという単純な動機で始めたのだが、私の中には、子どもたちから絵本の読み方を教わりたいという気持ちも少しはあった。小学低学年向けのボランティア活動ということになるが、五年間続けっぱらく休み、近々再開する予定になっている。

一週間おきの金曜日の午後、空いている部屋に「一年生と二年生の絵本クラブ。おもしろい絵本が待ってるよ！」というポスターを貼らせてもらった。来る子どもの数はま